■子育ては親の権利

子育ては親の責任であるが、同時に“権利”でもある、と私は思ふ。子供を立派に育て上げることは、大発明や大発見に勝るとも決して劣らない、「人類に対する貢献」であると思ふからである。立派な発明や発見は、確かに私たちの生活を向上させるのに役立つことであらうが、私たち“人間”そのものを向上させるものではない。然し、立派に子供を育て上げることは、“人間”そのものを向上させることであるから、その価値は一層高いものである、と私は思ふわけである。

だから、“子育て”といふ仕事に従事できることは、人間として実に有難い仕事を与へられたわけであり、感謝すべき事だと私は思ふ。それで、私は、「子育ては“天与の賜物”であり、親の特権である」と言ふわけである。然し、権利の第一は母親に在って、父親の権利はその次である。とは言へ、時により場合によっては、父親も、カール・ヴィッテのやうに、母親以上に主導権を取って子育てに当ることもあって良い、と思ってゐる。かのペスタロッチも、「カール・ヴィッテが息子のカールを立派に育て上げたことは、人類に対する大きな貢献であった」として、これを高く評価してゐるが、私も同感である。

子育ては決して楽な仕事ではないが、それだからこそ楽しいのではないか。人間は、楽な事ばかりしてゐたのでは、決して楽しく感じられないやうに生れついてゐるらしい。その事は、「汗水流して働いた時に飲む一杯の水の味は、怠けてゐて飲み食ひする、どんなに贅沢な飲み物や食べ物の味に勝る」といふ事でよく解る。それに、人間は「自分の成功よりも子供の成功の方が嬉しく感じられる」やうに作られてゐるらしい。子育てを厄介視するとは考へ違ひも甚しい。